

道写協

北海道写真協会

事務局 ■札幌市中央区大通西3丁目6道新文化事業社内
011-210-5735(直通) 011-207-3939(FAX)
<http://www.dosyakyu.org/>

第108号

第五十六回道展大賞に田本實氏

二月二十八日、三月二日の両日道新会議室において第五十六回写真道展の審査が行なわれました。応募総数四、五六六点、前回よりも百十五点下回ったものの、応募者数では二十五名増加しており、写真道展への関心の高さが窺われます。審査は道展審査員二十五名と招聴審査員として、谷口勲夫氏、岡本洋典氏の二名を迎えての審査となりました。

また、学生写真道展は応募者数一七七名、応募総数八九三点と前回を大幅に上回る結果となり各学校、全道高文連大会への働きかけが実ったものと評価しています。

第一日は、学生写真道展、会友奨励賞の選考に始まり本展審査は各部共に第二次審査まで行いました。学生写真道展最高賞の北海道知事賞には、伊東末宮さん(苫小牧南高校)、会友奨励賞に佐藤寿美子さん(札幌支部)、準奨励賞に浪岡和雄さん(室蘭支部)高橋正さん(芦別支部)が選ばれ、本展第二次通過作品八五六点は、一日目の審査を進めました。

第二日は、第三次・第四次を行い入賞入選作品が決定し、引き続き五次審査により第一部から第三部の入賞作品二十六点が選考されました。

今回は入賞作品一席・二席三席の決定に当たり常任審査員の記名投票方式を採り入れ

ての新たな試みで選考が行なわれました。第五十七回展からは、この方式で入賞作品の最終決定まで全審査員が参加して行われることとなります。午後二時四十分頃、審査会場が緊張感に包まれた雰囲気の中、各大臣賞が決定されました。

続いて、審査委員長が第三部の環境大臣賞、田本實さん(旭川支部)の「お先に」を第五十六回写真道展大賞に選考した瞬間、場内の審査員から拍手が湧き上がり二日間に亘る全審査日程が終了しました。

審査委員長の総評として、全体を通して時代の反映なのか写真が綺麗過ぎる感じと違和感をもった。特にデジタル写真の普及と高度なソフトの出現により合成写真の判別が難しくなってきたり、常識的判断で審査をしていくしかないと思う。第一部、二部ともに強烈なインパクトのある作品が少なかった。第三部は季節感に富んだ動植物の作品があったと感想を述べられた。

過密なスケジュールで行なわれましたが、審査員各位、進行委員並びに事務局の方々のご協力により無事終了できましたことに感謝申し上げ審査報告とさせていただきます。

写真道展実行委員長 本郷正利

審査を終えて

日本写真家協会会員

岡本洋典



招聘審査員として、初めて道展審査に加わらせて頂いた。道内最大規模の写真コンテストであることは言うまでもなく、三十人もの審査員が同時に審査するという、全国的にもあまり例のない審査方法であるため、一体どのように作業するのか関心を持っていた。

私的には、毎年道内複数のコンテスト審査を担当しており、多様なジャンルの作品を二度に拝見することは慣れているが、三十人もの視点による審査は想像し難い初の体験だった。終わってみれば、整然且つ厳正に審査は進行し、長い歴史と経験に裏付けられた取組みであることが納得できた。特に、今回審査委員長を務められた志賀先生は、私に大雪山への大きな憧れを抱かせてくれた大先輩であり、共に審査に携われたことは何よりの喜びである。

第3次審査から加わらせて頂いたが、出品作品を見渡して感じた点を記させて頂きたい。

一つはプリントのクオリティーであるが、昨今はデジタル写真技術の普及によりパソコンと家

庭用のインクジェットプリンタがあれば、自家製プリントで手軽に数多くの作品を出品する事が可能だ。しかし、プリントのクオリティーから判断するに、デジタルデータの扱いにおける未習熟さが目についた。もちろん個人差はあるが、フィルムライクな表現を試みる傾向が強く、撮影後の行き過ぎたレタッチによるデータの破綻が見受けられた。

優れた写真作品はフィルムとデジタルの如何を問わず、ほぼ一〇〇%撮影現場で決着するものであり、パソコンから創作されるものではない。レタッチは隠し味程度に留めたい。

本コンテストはプリント審査であり、出品者にはフィニッシュワークとしてのプリントに対し一層の完成度を求めたい。一見手軽に見えるデジタル写真はカメラ・パソコン・プリンタといった各デバイスを一貫した色域で管理するカラーマネジメントについて学習することが必要であり、その上で初めてデジタル写真の奥の深い表現が可能となる。

プリント方法についても、デジタルインクジェットではなく、必要に応じて銀塩プリントを採用するのも得策となる。この点、北海道の写真家はプロアマを問わずデジタル写真を基礎から学ぶ機会が非常に限られていることを痛感せざるを得ない。

多人数による審査の利点は多角的な視点による公平性にあると思う。そのため、審査員各人には優れた写真的素養や資質が求められるのも確かだ。昨今のデジタル写真技術についての理解や実践も含め、出品者の創作理念や表現手法を直感的且つ論理的に評価するには、自らが表現者であり続ける事が必要だ。私自身も専門はネイチャーであるが、絶えず他のジャンルの優れた作品を数多く鑑賞する事を自分に義務づけている。

来年のことを言うとう鬼に笑われるそうだが、自分自身の「写真を見る目」をさらに鍛え、微力ながら写真道展に貢献させて頂きたい。